様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６１７
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２００３０

研究課題名（和文）ヘーゲル論理学の発展史的および分析哲学的研究

研究課題名（英文）Developmental and analytical philosophical study of Hegel's logic

研究代表者
久保　陽一（kubo, yoichi）

駒澤大学・総合教育研究部・教授

研究者番号：７０１１９０９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,800,000円、（間接経費）　840,000円

研究成果の概要（和文）：　ヘーゲル論理学とは何かについて発展史的見地から研究した。その結果次の点が明らかになった。ヘーゲル論理学は通常の論理学でなく、存在論であるが、存在を「関係」としてとらえ、それを「認識の理念」によって根拠づける理論である。その方法は「外的関係」を「内的関係」に転ずることであり、そこから、概念の「弁証法」と「自己内反省」が生じる。この構想は１８０４/５年の「論理学/形而上学」から始まり、その「論理学」部分が１８０８年頃から思弁的に再編成されることによって、１８１１年頃に「大論理学」の概要が形成されるようになった。

研究成果の概要（英文）：I investigated Hegel's Logic from point of view of its development. The result is as follows. It is not logic in its usual meaning, but a ontology of relation. It gives foundation for concepts as relation by idea of cognition. Its method is, to change external relation to internal relation. There results "dialectic" and "reflexion on itself" of consepts. This Idea begann in "logic and metaphysics" of 1804/05. Hegel reformed this part of logic in 1808. In 1811 results outline of "Great Logic".

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：ヘーゲル　論理学　存在論　関係　認識　内的関係　弁証法　自己内反省

１　研究開始当初の背景

ヘーゲルの哲学体系は論理学、自然哲学、精神哲学から成り、「理念」と呼ばれる絶対者の諸形態を叙述するものである。そのうち精神哲学にかんしては、社会哲学や国家論、歴史哲学、芸術哲学の面で現代思想を開拓したものとして高く評価されてきたが、自然哲学や論理学はマルクス主義を除けば、必ずしも十分な理解と評価を得るに至っていなかった。しかし１９６０年代頃からヘーゲル論理学に対しても新たな光が発展史や背景思想の面からあてられるようになってきた。

応募者もこの研究動向に学びながら、初期ヘーゲルの思想の発展またイエーナ時代の論理学を研究してきた。その結果、次のことが明らかになった。ヘーゲルは当初主に宗教論を通して「生」すなわち「人間と自然との対話的連関」の根源的洞察を抱き、それを「有限者と無限者との総合」としての「理念」の哲学体系として展開しようとした。これは、カントやフィヒテによる「知の客観的実在性」の観念論的根拠づけに対するヤコービの批判を受けて、「知の客観的実在性」を「生と認識」という枠組みの中で問いなおすという、当時の思想背景のもとで企てられたものである。その中でヘーゲルは「理念」の体系において、まず「導入」としての「論理学」を「形而上学」によって根拠づけようとした。その際、「論理学と形而上学」は「関係の存在論」とでも呼べるような理論として生じた。それは、一般に「質」「量」「関係」などの存在論的概念を一般に「関係」の様式として捉え、そこで当初見出された「外的な関係」(項が関係から独立に存在し、その項と項との間に外からの反省によって見出される関係)を「内的な関係」(項は関係から独立に存在せず、項の本質は他項と関係においてのみ認められる）に転じ、そこに「弁証法」と「自己内反省」が生じるという考えである。

そこで、このような「関係の存在論」がその後いかにして、「精神現象学の論理学」、ニュルンベルク・ギムナジウムの論理学講義、さらには『大論理学』の思弁的論理学へと展開したかを究明することが、課題となってきた。その際、マクダウエル、ブランダムなど最近のアメリカのヘーゲル研究の動向にも促されて、ヘーゲル論理学を同時に分析哲学との関連で問題にすることも課題となってきた。というのはブランダムやマクダウエルはヘーゲルの「全体論」や反二元論的な認識論を高く評価し、ヘーゲルの「関係の存在論」に共鳴を見出しつつあるが、彼ら関心は主に『精神現象学』に向けられており、論理学を十分に取り上げていないからである。かくて、イエーナ論理学から後期の思弁的論理学への発展と、そこから見出されるヘーゲル論理学の分析哲学的意味を解明することが、研究開始当初の課題であった。

２　研究の目的

この課題のために、ヘーゲル論理学の概念史および体系構想の歴史をたどる必要が生じた。具体的には、１８０４～０５年の『イエーナ論理学・形而上学』の翻訳と注釈、「精神現象学の論理学」の再構成、ニュルンベルク・ギムナジウム論理学講義の特徴の解明、『小論理学』と『大論理学』の内容の把握、それらに関する海外および日本の二次文献の研究、ブランダムの”Articulating Reasons”の翻訳が研究目的となった。

３　研究の方法

この目的を達成するために『イエーナ論理学・形而上学』の翻訳ノートを作成し、『精神の現象学』を解読し、アカデミー版第１０巻に公刊されたニュルンベルク論理学の読解ノートを作成し、『大論理学』『小論理学』の特に本質論の読解ノートを作成し、さらに内外の二次文献をも参考にしながら、ヘーゲル論理学の発展史をたどることにした。

４　研究成果

（１）『イエーナ論理学・形而上学』(1804/05年）における「関係の存在論」については、”Unendlichkeit und Erkennen. Logik und Metaphysik Hegels als der tranzendentale Idealismus” というドイツ語論文にまとめ、共著”Mythos-Geist-Kultur”(Fink 社、2013年)に掲載し、同じ内容をケルン大学で講演した（2013 年 12 月)。

（２）「精神現象学の論理学」に関しては、その一部を、日本ヘーゲル学会の公開セミナーにおける講演（2012 年 2 月、2012 年 9 月、2013 年 7 月）の中で、述べた。

（３）ニュルンベルク・ギムナジウム論理学講義の分析を含めた、イエーナ論理学から後期の思弁的論理学への発展に関する総括を、日本ヘーゲル学会のシンポジウムで報告し（「関係の存在―認識―論の展開」、2012 年 6 月)、『ヘーゲル哲学研究』19 号に掲載した（2013 年)。その成果は次の通りである。「関係」としての存在論は「認識の理念」によって根拠づけられ、「関係の存在―認識―論」というものになった。この「関係の存在―認識―論」は当初、「導入」としての「論理学」と「本来の哲学」としての「形而上学」の二段階において行われたが、その後、「論理学」と「形而上学」が一体化し、一つの思弁的な「学」になった。やがてかの「論理学」部分が 1808 年頃から思弁的な「学」の見地から再編成され、1811 年頃に『大論理学』の編別

構成が確定した。このイエーナ論理学の思弁的再編成は、「本質」概念と「内的合目的性」概念の導入によって可能になったと思われる。
（４）論理学の実在哲学への応用に関して、「自由」の思想が「概念」概念に基づくという趣旨の発表”Die Eigentümlichkeit des Gedankens der Freiheit bei Hegel”を、台湾の東海大学で行われた東南アジア・ヘーゲルネットワーク(2013年9月)において行った。
（５）日本におけるヘーゲル論理学受容の歴史（フェノロサ、田辺元、鈴木権三郎、武市健人）についてドイツ語論文 Begruendung der “These-Antithese-Synthes. Rezeption der Logik Hegels in Japan”にまとめ、共編著“Hegel in Japan”(Lit社 2014年、印刷中)に掲載した。
（６）これと関連して、近代日本哲学における伝統思想とヨーロッパ思想との関連について、講演”Über die Beziehung zwischen den traditionellen und europäischen Gedanken in den neueren Philosophien Japans. Von Nishi zu Kuki”を 2012 年 12 月、ドイツ・リューネブルク大学で行った。

５　主な発表論文等

［雑誌論文］（計 11 件）
①　久保陽一、理想の現在性――ヘーゲル『精神の現象学』における道徳性の問題、『駒澤大学・総合教育研究部紀要』、査読なし、8巻、2014、37-64
②　Yoichi Kubo、 Der Einfluß Heideggers auf die neueren japanischen Philosophen、in: Berliner Schelling Studien、 査読なし、Heft 11、2013, 69-91
③　久保陽一、ヘーゲルにおける関係の存在―認識―論の展開、『ヘーゲル哲学研究』、査読なし、19巻、2013、60-71
④　久保陽一、理性・観念論・カテゴリーー『精神の現象学』理性章序論を読む、『ヘーゲル＜論理学＞研究』、査読なし、19 巻、2013、27-49
⑤　Yoichi Kubo 、Über die Beziehung zwischen den traditionellen und europäischen Gedanken in den neueren Philosophien Japans. Von Nishi zu Kuki、駒澤大学・総合教育研究部紀要、7 号、査読なし、2013、1-38
⑥　久保陽一、意識の経験の学の構想――ヘーゲル『精神の現象学』「緒論」を読む、『駒澤大学「文化」』、査読なし、31 号、2013、1-28
⑦　久保陽一、渡邊二郎先生のシェリング研究について、『シェリング年報』、査読なし、20 号、2012、19-28
⑧　久保陽一、ラインホルトとフィヒテ――ラインホルトにおける超越論的観念論から合理的実在論への展開をめぐって、『フィヒテ研究』、査読なし、18 号、2010、55-69

［学会発表］（計 9 件）
①　Yoichi Kubo 、Unendlichkeit und Erkennen. Logik und Metaphysik Hegels als der transzendentale Idealismus、ケルン大学哲学科講演会、2013 年 12 月 17 日、ケルン大学（ドイツ）
②　Yoichi Kubo、Die Eigentümlichkeit des Gedankens der Freiheit bei Hegel、第一回東南アジア・ヘーゲルネットワーク国際会議、2013 年 9 月 13 日、東海大学（台湾）
③　久保陽一、『精神の現象学』における道徳性と道徳的宗教、日本ヘーゲル学会、2013 年 7 月 28 日、跡見学園女子大学
④　Yoichi Kubo 、Über die Beziehung zwischen den traditionellen und europäischen Gedanken in den neueren Philosophien Japans. Von Nishi zu Kuki、リューネグルク大学招待講義、2012 年 12 月 18 日～12 月 19 日、リューネブルク大学（ドイツ）
⑤　久保陽一、理性・観念論・カテゴリー、――『精神現象学』理性章序論を読む、日本ヘーゲル学会、2012 年 9 月 30 日、跡見学園女子大学
⑥　久保陽一、関係の存在―認識―論の展開、日本ヘーゲル学会、2012 年 6 月 16 日、北里大学
⑦　久保陽一、意識の経験の学の構想、――『精神現象学』「緒論」を読む、日本ヘーゲル学会、2012 年 2 月 19 日、跡見学園女子大学

［図書］（計 4 件）
①　U.R.Jeck、M.Frank、 B.Boeschenstein、K.Harriies、 A.Grpossmann、 G.Rauler、M.Schmitz-Emans、K.Vieweg、 E.Rozsa、Y.Kubo 、 A.Speicht 、 S.Hobuss 、H.J.Sandkuehler 、 Y.Foerster-Beuthan 、D.Koehler 、 N.Boyle 、 K.Anderrmann 、M.Schefczyk、 C.Schues、 J.Ruesen、 Fink Verlag 、 Mythos-Geist-Kultur 、 2013 、127-141
②　久保陽一、筑摩書房、ドイツ観念論とは何か、2012 年、379
③　久保陽一、知泉書館、生と認識――超越論的観念論の展開、2010 年、334
④　久保陽一、加藤尚武、満井裕子、栗原隆、竹島尚仁、阿部ふく子、幸津国生、山口誠一、山口祐弘、大河内泰樹、赤石憲昭、神山伸弘、権左武志、早瀬明、理想社、ヘーゲル体系の見直し、2010 年、3-7,63-79

６　研究組織

(1)　研究代表者
久保　陽一（KUBO, Yoichi）
駒澤大学・総合教育研究部・教授
研究者番号：70119098